

研究ノート

受付：2019. 9. 9

受理：2019.12. 4

作業療法教育における運動学実習 —— 構造構成主義に基づく「作業」に根ざした授業の構想と実践 ——

森 本 真太郎

日本福祉大学 健康科学部

Kinematic practice in occupational therapy education - The plan and practice of the class which originate in "occupation" based on the Structural constructivism -

Shintaro Morimoto

Faculty of Health Sciences, Nihon Fukushi University

Keywords: 作業療法教育, 学内教育, 運動学実習, 構造構成主義

1. はじめに

作業療法では、その人にとって「意味のある作業」を行うことの重要性が述べられている¹⁾。「作業」とは個人的、文化的に意味がある活動の一群と定義され²⁾、「意味のある作業」をすることで健康な状態へと変化していくとされる³⁾⁴⁾。そしてこの「作業」を治療手段として用いるのが作業療法である。日本作業療法士協会⁵⁾によると、「作業療法は、人々の健康と幸福を促進するために、医療、保健、福祉、教育、職業などの領域で行われる作業に焦点を当てた治療、指導、援助である。作業とは、対象となる人々にとって目的や価値を持つ生活行為を指す」と定義されており、上記の論旨とも符合する。

他方、作業療法教育では、教育内容が専門基礎分野と専門分野に分けられ、国家試験の出題基準⁶⁾もこれに沿った内容になっている。中でも専門基礎分野における運動機能学（骨関節の解剖と運動学）の問題は、例年同分野の20%前後の出題率となっており、作業療法教育において重要な分野の一つである。

本論で取り上げた「運動学」の出題基準6)の内容は、力学、運動器の構造と機能、上肢・下肢の運動、動作解析、姿勢、歩行、運動制御等の項目立てになっており、各養成校の教育課程においても、これに即した教育が実践されていると思われる。

中村ら⁷⁾によると運動学は次の5分野に分類できるとされる。

- 1 : Structural and functional kinesiology : 身体運動に関係する人体の形態と機能との相互関係を扱う。
- 2 : Exercise kinesiology : 身体運動と生理学、生化学などの基礎科学との関連を扱う。
- 3 : Biomechanics : 古典力学や工学技術を用いて人間の身体運動を分析する。
- 4 : Developmental kinesiology : 身体運動と成長、身体発達、栄養、加齢の関連を扱う。
- 5 : Psychological kinesiology : 身体運動と意味との相互関係、身体像、自己像、美的表現、動機付け、

コミュニケーション、パーソナリティなどを扱う。

この5分類を踏まえ、前述した作業療法教育における運動学を国家試験の出題基準に照らすと「Structural and functional kinesiology, Exercise kinesiology, Biomechanics」が中心的テーマとして採用されてきたことが窺われる。以下本論では便宜的に「Structural and functional kinesiology, Exercise kinesiology, Biomechanics」を「狭義の運動学」とし、「Developmental kinesiology, Psychological kinesiology」を「広義の運動学」と呼ぶ。

一方、作業療法の臨床場面や臨床実習では、クライアントの疾患や症状、人格、価値観、実習指導者の経験や依拠するパラダイム、実習施設の環境因子等の状況が大きく異なる。また、学生が運動学的に解明を試みる現象も一回起性ということが多い。これは実質的な現象を対象とする作業療法学の特徴であるといえる。宮前⁸⁾も、作業療法は、人間の心身の問題を社会・文化の所産である作業と関連づけて解決を図ろうとするもので、社会/文化、心理、生物学という複雑で具体的レベルの事象を対象とし健康に寄与することが作業療法の独自性であると述べている。

つまり、「狭義の運動学」のみでは、作業療法の思想に対し限局的であり、作業療法の守備範囲と考えられる「広義の運動学」をカバーすることができない。例えば、学生が身体障害領域の臨床実習において、クライアントの座位姿勢を分析する場面を想定してみる。すると学生は作業療法室に設置された訓練台に座るクライアントの様子を客観的に図と文章で記録に残す。「狭義の運動学」を用いればこれで良い。しかし、クライアントがなぜ訓練台に座っているのかといった「意味」に言及されることはない。むしろ作業療法の観点から「広義の運動学」を踏まえて姿勢を分析するのであれば、「座っている」のではなく「座らされている」と解釈するのが自然であろう。評価を受けるため義務的に「座らされている」クライアントの姿勢を運動学的に分析することが、作業療法の実践にどのような効用をもたらすだろうか。その「座位」には、クライアントの動機付けや肯定的な意味付けがなされているのだろうか。先に述べたように、作業療法学は、人間を部分の集合として捉えて細かく分析し理解しようとする要素還元主義ではなく、人間的な事象を「作業」の観点から包括的に理解しようとする学問

体系である。この観点に基づくと、作業療法学における「広義の運動学」と「作業」の概念との親和性は高く重要と考えられる。

ここまで「狭義の運動学」を用いた人間理解をやや否定するような言論になった感があるが決してそうではない。ここでの論旨は、狭義の運動学的分析も広義の運動学的分析も、作業療法の過程における「方法」であり、「方法」はクライアントを運動学的に理解するという「目的」を達成するための「手段」であるということである。よって狭義の運動学のみを用いることを前提とするのではなく、まずはどの分野の運動学を用いてクライアントを理解しようとしているのかに自覚的になることが重要と考える。つまり、実際の臨床場面における「状況」と、何を明らかにしたいのかという「目的」に応じて運動学的分析の分野と方法を選択し、如何にしてクライアントの「意味のある作業」との関連性を示せるかが、作業療法士が用いる運動学の独自性と専門性を語る上で重要であると考えられる。

そこで、先に挙げた中村らの運動学の5分類を踏まえ、作業療法の独自性と専門性を有した運動学的分析を実践するための原理的な思考が必要となる。ここでいう「原理」とは、普遍的に了解される可能性の高い理路を指す⁹⁾。

本稿では作業療法養成校の運動学実習において、作業療法士の治療手段である「作業」の概念的特性を踏まえた人間の運動学的理解に寄与する授業の展望を得ることを目的とする。

2. 方法

目的を達成するために、西條¹⁰⁾によって人間科学の原理として体系化された科学論である「構造構成主義」を援用する。構造構成主義とは、我々に立ち現れた全ての経験である「現象」を第一義に尊重し、様々な理論や方法論を組み合わせることで信憑性のある「構造」を構成するためのメタ理論である。その具体は、構造構成主義の中核的概念である「関心相関性」を認識装置とし、物事の本質からなる「原理」を把握する学問であり「価値の原理」「方法の原理」等の原理群からなる。構造構成主義で扱われる原理の射程は広範であり、様々な領域や科学の多様な次元に適用可能な理路を提供している。また様々な関心に依拠して多様な姿をみせる¹¹⁾とされることから、現在も刻々と深化していると考えられる。そのため構造

構成主義の基本構造及び詳細は他書を参照されたい¹⁰⁾。

ここでは本稿の目的である、作業療法教育の運動学実習における「作業」の特性を踏まえた人間の運動学的理解に寄与する授業展開の知見を得るために、構造構成主義にて扱われる「価値の原理」「方法の原理」を参照し、作業療法における運動学との接点について述べる。その後、著者が行なった授業の実践報告を行う。

2.1 価値の原理¹²⁾¹³⁾

価値の原理とは、全ての価値は目的や関心、欲望に応じて立ち現れるというものである。これを関心相関性といい「存在や意味や価値といったものは、すべて身体や欲望、関心、目的といったものと相関的に規定される」という側面を言い当てた原理であり、構造構成主義の中核概念をなす。関心相関性は、竹田青嗣が定式化した「欲望相関性」が元になっており、正確には「身体・欲望・関心相関性」というものである。これについては、使用される文脈（目的）によって、関心相関的に、その基軸を「身体」「欲望」「関心」のいずれかに変えることが可能とされる。

作業療法場面においては、クライアントの健康状態、生活機能、背景因子、障害体験等が個人によって大きく異なる。そこで、「価値の原理」の関心相関性を認識装置として用いることで、疾患の発症に伴うクライアントの身体的状況や内的な意味体験、作業療法士が明らかにしたい現象に自覚的になることができる。

例えば、先に挙げたクライアントの座位姿勢評価では、疾患による特有の座位姿勢に関心があれば、物理的環境の変化が少ない訓練台の座位姿勢に対する意味や価値が高まるだろう。一方、座位能力の低下が入院生活へどのように影響しているのかに関心があれば、毎日使用する居室のベッド上や食堂の椅子等への座位姿勢に対する意味や価値が高まると思われる。

このように、目的・関心と、意味・価値が相関的に規定されることに自覚的になれるという点において「価値の原理」は、如何なる状況においても適応可能な理路を提供してくれる。

2.2 方法の原理¹⁴⁾

構造構成主義において、「方法」は「特定の状況において使われる目的を達成するための手段」と定義される。原理上、どんな状況、目的においても機能する「絶対に

正しい方法」はない。これまで正しいと思っていた方法も、状況や目的が変われば「間違った方法」になりうる。つまり「どんな状況で」「何をしたいのか」を抜きにして、「どういう方法か」が決まることはない。方法の有効性は、状況と目的に応じて決まり、いつでもどこでも例外なく妥当するという普遍性を有している。故にこの考え方は原理といえる。

前述したように、作業療法場面において作業療法士を含めた当事者の状況や環境は一回起性かつ多様性に富んでいる。運動学的に姿勢を分析しようにも、その時々「状況」が現実的な制約として常につきまとう。よって「何をしたいのか」という理想とする「目的」があっても、現実的な制約がある状況下では、その遂行が困難となる。そのため、プラットフォーム上の座位姿勢を運動学的に分析したいという「目的」があっても、クライアントの離床が困難な状況や、プラットフォームを他のクライアントと共同使用する状況も想定できる。このような場合、「方法の原理」は、「目的」と現実的な制約等の「状況」に応じて、差しあたって適用可能かつ妥当な評価方法を柔軟に変更するための理路を提供してくれる。

2.3 構造構成主義に基づく運動学実習の実践

2.3.1 対象

作業療法学を学ぶ大学2年生43名を対象とした。

2.3.2 倫理的配慮

ヘルシンキ宣言及び文部科学省・厚生労働省の人を対象とする医学系研究に関する倫理指針を遵守し、学生には本実践の内容を口頭及び書面にて説明し同意を得た。

2.3.3 授業の流れ

授業は2年生の9月～10月期に行われた。著者は90分の授業を5回担当し、講義と学内実習のファシリテートを行なった。1～5回の授業概要を表1に示す。

2.3.4 課題設定

授業では、各グループ3～4名で1つの「意味のある作業」と、関心（目的）を設定し、「価値の原理」「方法の原理」を思考の基盤として「意味のある作業」の運動学的分析を行うことを課題とした。情報源は中村らの基礎運動学⁷⁾を基本としたが、関心（目的）に照らして情報を補う必要があれば図書館等での文献検索も許可した。

表 1 授業の概要

回 数	内 容
第 1 回	講義：科目のオリエンテーション，運動学（講義）の復習，「作業」の概念的特性の復習
第 2 回	講義と演習：観察のポイントと記録方法
第 3 回	実習：グループで「意味のある作業」の運動学的分析
第 4 回	
第 5 回	

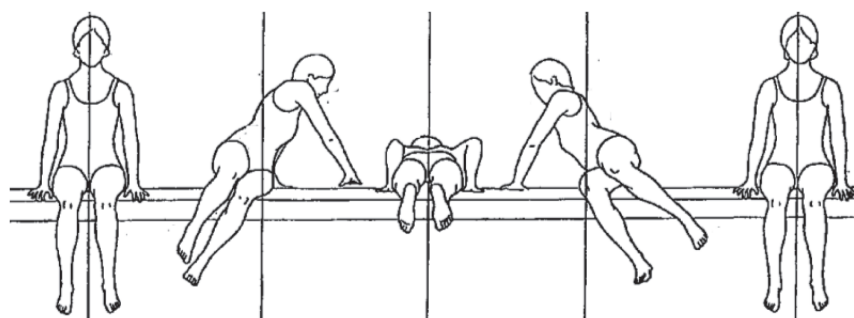


図 1 授業で提示した支持面を変える一連の動作（文献 15 より改変引用）

また，関心（目的）に応じて必要な情報を必要な分だけ簡潔にまとめる力を養うために，レポートを A4 サイズで 3～4 枚とした．これは関心の設定から考察までの内の一貫性を高めることで論点がぶれないことを意識づけするための適切な文量であると判断したためである．授業内課題は，結果のまとめまでとし，考察は各自の宿題とした．レポートのテーマは「自らの意味のある作業の運動学的分析」としたが，レポートの内容によってはテーマの変更を許容した．

しかし，学生たちにとって自らの「意味のある作業」は，例えるならば呼吸することと同じくして自明的であるため，自らの「意味のある作業」に気付けないことが予測された．そこで課題着手の手がかりとして「支持面を変える一連の動作」¹⁵⁾を一部改変して提示した（図 1）．この動作は，「作業」の観点から見れば抽象的な動作であり，一見この動作にどのような意味があるのかわからない．しかし「狭義の運動学」の観点からみれば，各身体部位の運動，身体重心の移動，支持基底面の変化，各身体部位の立ち直り反応，平衡反応が観察できる．また運動形態として開運動連鎖や閉運動連鎖も含まれており，狭義の運動学実習で用いる素材として有用と考えられる．

しかし，この動作を提示する狙いはあくまでも「作業」の観点からみて抽象的な「支持面を変える一連の動作」

について，学生がどの部分に着目し，どのような「意味のある作業」にイメージを引きつけ，どの分野の運動学と関連付けるかを考えるための手がかりとすることである．つまり，学生たちには自明的な「意味のある作業」に気づいてもらうための契機とするために提示した．

3. 「運動学実習」実践の結果

3.1 授業について

すべての学生が全 5 回の授業に出席した．

第 1 回は講義を実施した．主な内容は，本科目のオリエンテーション，過去に講義として実施された運動学の復習，「作業」とは何かを学生と共に振り返った．

運動学（講義）の復習については，四肢・体幹運動の主動筋，身体重心や支持基底面等の「狭義の運動学」で用いられる用語が学生から語られ，概ね過去の運動学の講義内容が記憶に定着していることが確認できた．

一方，運動学的に人間を理解すること，特に運動学的分析について，どのような印象かを問うと，「難しい」「できることならやりたくない」等の困難感や抵抗感が口々に語られた．また，「作業」とはなにか？「作業」と「運動学」にはどのような関係があるのか？という問いかけには，回答に難渋する様子が見られ，「作業」についての明確な定義を理解していないことと，今回の問いかけの内容を考えたことすらないことが確認できた．

よって、「作業」の概念に関する基本的な知識から解説を加える必要があった。

第2回は、臨床実習を想定した運動学的知識の活用法を講義と演習形式で実施した。記録方法については、演習後に学生全員に対し著者から個別フィードバックを行なった。

第3回以降は、「支持面を変える一連の動作」からイメージされる学生自身の「意味のある作業」について、3~4名のグループに分かれて運動学的分析を行なった。著者はグループ学習のファシリテーターとして参加し、グループの議論が停滞している時や、収集した情報を整理する際に助言を行なった。しかし、基本的には学生の能動性を尊重し、学生から著者に相談を持ちかける形式で実習を進めた。

第3回以降の実習で、まず初めに議論が停滞したのが「意味のある作業」の設定、つまり関心の設定であった。教員は、各グループで設定した「意味のある作業」を確認し、「なぜその作業を設定したのか?」、「自身にとって、どのような意味があるのか?」「支持面を変える一連の動作のどの部分から「意味のある作業」をイメージしたのか?」等の議論を進め、関心相関的に具体的な関

心(目的)設定に繋げるための関わりをもった。

その後「意味のある作業」の設定ができたグループは、ほとんどのグループで議論が停滞することではなく、互いに対話を重ねながら能動的にグループ学習を進めることができた。また「方法の原理」に従い、運動学的評価法を教科書⁷⁾や講義資料から発見し、ホワイトボードを使用しながら評価計画を立案し、情報を整理する様子がみられた。関心(目的)の内容によっては教室を離れ、実際に行なっている作業環境の中で動作を実施し、評価結果をまとめるグループもあった。

授業中の様子と学生が使用したホワイトボードの一部を図2及び図3に示す。

3.2 提出されたレポートについて

授業後に提出されたレポートの一部を表2に示す。紙面の制約上、全てを示すことが困難なため、表2は学生が設定した関心(目的)とレポート内容を著者が要約したものである。

4. 考察

本稿では、構造構成主義の諸原理である「価値の原理」「方法の原理」を作業療法教育の運動学実習に取り入れることにより、作業療法士が治療手段として用いる「作業」の特性を踏まえた人間の運動学的理解に寄与する授業の在り方について論じてきた。そして、構造構成主義に基づき運動学実習を展開し得られた結果を示すことで、その有効性の一端を示すことができたと考えられる。

今回授業に参加した学生は、第1回目で「狭義の運動学」の知識を有していることが確認できた。しかし「作業」の話題になると、たちまち回答に難渋する様子がみられた。この事実からも、本科目の受講前は、国家試験における運動学の出題基準に即した教育(狭義の運動学)を受けてきたことが推察された。

そこで本稿では、人間科学のメタ科学論である構造構成主義の中核概念とされる関心相関性を軸に、様々な現象を運動学的に説明できることを示した。

実際の授業では、教員のファシリテーションの元、全グループが運動学的に分析するための「意味のある作業」を設定することができた。これについては、関心(目的)設定の段階で、分析に取り組む動作に「意味」が付与されていることになり、この時点で「広義の運動学」に含まれる要素を扱うことになる。そして、設定した関心

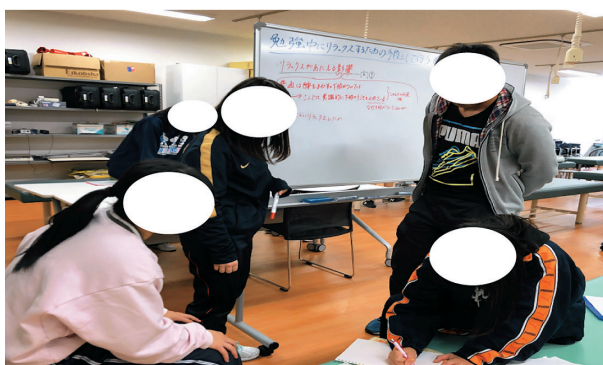


図2 グループ学習の様子

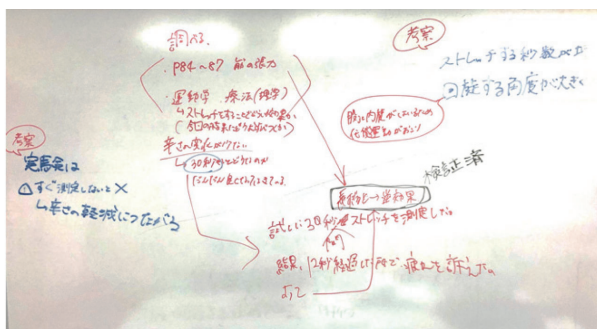


図3 学生が議論で使用したホワイトボードのイメージ

表 2 提出されたレポートの一例 (著者による要約)

	関心設定	レポート内容の要約
1	被験者となった大学生の女性は、レポート作成を日常的に行っており、同じ端座位姿勢でレポート作成をすることが多く、時折端座位のまま体幹を回旋させて腰部のストレッチを行う。我々は腰部部のストレッチの際にどのような骨盤帯と下肢の運動を止めているのか、また、ストレッチの持続時間に応じてどのくらいリラクセスできたのかに関心を抱いた。	15分間椅子座位で勉強後、ストレッチ時間を1秒、3秒、5秒、30秒で設定し、体幹と下肢の動きの特徴を観察し記述した。ストレッチ後の「辛さ」を自覚的運動強度 (RPE) とインタビューで評価した。一般的に体幹回旋を行う場合、頭頸部→体幹→骨盤帯→下肢の順に運動するが、ストレッチの場合「頭頸部と体幹」と「骨盤帯と下肢」の運動性を結ぶことで腰背部筋のストレッチが可能となる。ストレッチ時間の違いから、最適なストレッチ時間を考察した。
2	大学生の被験者は、スマートフォンやパソコンを頻繁に使用する。今回は自宅環境を疑似的に再現し左側方にある物品を右上肢でとる際に、物品の位置の違いによる各身体部位の動きの特徴を観察した。加えて主観的情報(安定感と物品の取りやすさ)を収集し、最も効果的で安定した動作の条件について関心をもちた。	1名の被験者に対し「対象物の重さ」(推定質量スマートフォン約300g・パソコン約2000g)と、「被験者と対象物との距離」(45cm, 75cm, 100cmの3条件)を変えて動作を比較した。被験者は端座位を保ったまま、右上肢で左側の一定の距離に置かれたパソコンまたはスマートフォンを取る動作を行い観察にて動作の違いを比較した。加えて被験者の主観的評価として「取りやすさ」「安定感」を5段階に分けて回答してもらい、物品の質量、物品と身体との距離、主観的情報を関連付けて考察した。
3	被験者となった女性は、自宅においてベッドの右下にテレビのリモコンを置く習慣がある。ベッド上で横になりスマートフォンを操作している際、リモコンを取りテレビをつけて再びスマートフォンを操作する動作をよく行う。そこで、この動作を行うの際にどのようなようにバランスを保ち、身体を安定させているのか、その自動反応のメカニズムに着目した。	今回取り上げた動作を3層に分けて観察し、各身体部位に分けて観察事項を客観的に記述した。そして各相における各身体部位の状態、支持基底面と身体重心の変化の推定、それらに伴う姿勢反応出現のタイミングについて考察した。
4	被験者は枕元にスマートフォンを置いて寝ている。起床時にスマートフォンを置き忘れてしまう。登校前の心理的に焦った状況でスマートフォンを急いで手にとることが日常である。そこで今回、ベッド上で端座位からベッド端にあるスマートフォンをとり端座位にもどる際にみられる体幹と下肢の連動がどのようなに行われているのかに着目した。	本動作中に、保護伸展反応、平衡反応が出現するタイミングと、頭頸部・体幹回旋角度の関係に着目し評価した。スマートフォンを取る動作では、①頭頸部の平衡反応、②下肢の保護伸展反応、③下肢の平衡反応の順で反応が見られた。頭頸部から下肢に至る身体運動の連動と予測的連動メカニズムにも言及し考察した。
5	大学生の被験者は、毎日の通学に自動車を使用している。自動車を運転するために、幾つかの準備を行い運転を開始する。そのうち「シートベルトを着用する動作」に着目した。その理由は、シートベルトを締める際に、上肢の運動に関連して下肢・体幹が自動的に動く様子が観察されたため、その動作出現のメカニズムに興味をもったためである。	実際に使用している車を用いて、動作の観察と自覚的運動強度 (RPE) にて評価を行った。狭小空間内の動作のため、支持基底面・身体重心の動きを観察により推察し、下肢・骨盤帯のカウンターウェイトに着目して考察を展開した。「シートベルトを着用する動作」では上肢・体幹だけでなく、下肢の動きにも着目することで自動的にバランスをとろうと下肢の平衡反応が出現し、より安定した動作が行えること結論付けた。
6	大学生の被験者は、通学の手段として毎日自転車を使用する。この習慣化された「自転車に乗る」という作業において、自転車という不安定な物に跨る際に、どのように身体を安定を得ているのかに疑問を抱いた。	自転車で跨る一連の動作を4相に分類して観察を行いその時の被験者の動きと自転車の動きの関連についてまとめた。自転車という「不安定」なものに「安定」を求める際の運動学的な特徴を観察により客観的に記述した。また、各相で無自覚的に出現する自動反応にも着目した。考察では自転車と身体との距離から一体的に動作を行なっていることに触れた。
7	被験者は日常的に電車を使用し通学している。電車の中では、常に物理的環境が変化する場合の中で動作を行うことになり、高度なバランス制御が要求される。そこで、網棚の上から荷物を取る動作に着目し、「座位→立位→振り向き→荷物をとる→進行方向に向く」この一連の動作を、電車の中という動的環境の中で行っても転倒しないメカニズムに関心をもちた。	電車の車内環境を屋内にて疑似的に再現し「座位→立位→振り向き→荷物をとる→進行方向に向く」一連の動作について運動学的に観察した。また安定感に関するインタビューを行い、主観的情報を裏付けることで本動作を分析した。電車内という動的環境下における支持基底面の狭小化と、バランス制御の困難感(身体安定感)に着目し考察した。
8	被験者となった女性は、自家用車で通学している。そこで、毎日行う「車内の後部座席に置いてある荷物を取る動作」がどのように行われているのかに着目した。	日常的に使用している荷物の重さによって2条件(プランケット・4kg)に分けて動作を客観的に観察した。また、自覚的運動強度 (RPE) を評価し、動作の観察結果と関連付けて考察した。

(目的)を「方法の原理」に照らして運動学的な評価計画が可能となった。

実際に学生が分析に用いた評価は、「狭義の運動学」と「広義の運動学」の要素が含まれていることが表2からも明らかである。特に、学生が行った評価に特徴的な主観的次元の評価については、観察や測定等の客観的評価の結果を主観的評価で裏付けようとする意図が汲み取れる。これについては、多少の教員のファシリテートがあったが、ほぼ学生自身が能動的に導出した学習プロセスと結果である。よって、関心相関性を認識装置として導入することで、自身の「意味のある作業」に自覚的になることができ、従来の「狭義の運動学」から得られる客観的評価結果と、「広義の運動学」に含まれる主観的評価結果を柔軟かつ有機的に組み合わせた運動学的分析ができたと考えられる。

菅野¹⁶⁾は、人が何かを理解するという場合、まず「頭脳レベルの理解」というものがあるが、それだけでは理解は終わらないと述べている。つまり、理屈で理解するだけでは真の理解は得られないということである。では真の理解はどのように得られるのか。菅野は以下のように述べている。

なるべく自分の体験に引きつけ、具体的イメージに近づけて理解する。これが「身体的了解」につながり、「腑に落ちる体験」という感覚が訪れる。さらにそれが「自分ならこう考える」という自分なりの解釈をし、コメントできてはじめて理解したということになる。

本稿で取り上げた運動学実習の実践では、学生が自ら設定した「意味のある作業」を実際に行い、関心(目的)に照らして文献を調べ、グループ内で活発に対話する様子が絶えず見られた(図2・3)。パソコンの中だけで作業するのではなく、アイデアをホワイトボードに書き、導出された概念や課題を線で繋いで関連付けし、常時グループ内で対話し情報を共有しながら実習を進めることで、学生の能動性が引き出されたと思われる。ここでいう対話とは単なる会話とは違い、異なる考えや価値観をすり合わせるという意である¹⁷⁾。おそらく、関心相関性を基軸に導出された「意味のある作業」を運動学的に分析することで、菅野のいう「頭脳レベルの理解」が深化し、「身体的了解」による「腑に落ちる体験」を求め、学生間の活発な相互作用が生まれたと考えられる。

本稿では、研究ノートという特性上、著者が実施した授業の実践報告に止める。今後の展望は、作業療法を学

ぶ学生たちが行う運動学的実習について、構造構成主義を哲学的基盤とする運動学実習(以下、構造構成的運動学実習)を受講することで、どの程度本科目に対する興味関心が高まり、どのような意味や価値を抱いたか。また運動学的分析に対する苦手意識や抵抗感が低減したか。そして、その心境の変化の裏付けとなる受講中の意味体験を明らかにしたい。更に、複雑かつ具体的な事象を対象とする作業療法の臨床実習において、構造構成的運動学実習の意味体験が如何にして役立ち得るのかを検討していきたい。

謝辞

本稿作成にあたり、参加していただいた学生の皆さまに深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 吉川ひろみ：「作業」ってなんだろう 作業科学入門。医歯薬出版株式会社。pp. 1-17 (2008)
- 2) Zemke R, Clark F (著) 佐藤 剛 (訳)：作業科学 作業的存在としての人間研究。三輪書店。(1999) (Original work published 1996)
- 3) Nelson DL: Why the profession of occupational therapy will flourish in the 21st century. *American Journal of Occupational Therapy*, 51, pp. 11-24 (1997)
- 4) Catherine A. Trombly: Occupation: purposefulness and meaningfulness as therapeutic mechanisms. *American Journal of Occupational Therapy*, 49 (10), pp. 960-972 (1995)
- 5) 日本作業療法士協会：作業療法の定義。http://www.jaot.or.jp/about/definition.html (検索日 2019年2月12日)
- 6) 厚生労働省出題基準：平成28年度理学療法士作業療法士国家試験出題基準について。https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000058636.html (検索日 2019年2月12日)
- 7) 中村隆一，齋藤宏，長崎浩：基礎運動学第6版補訂。医歯薬出版，(2012)
- 8) 宮前珠子：クライアント中心の作業療法と作業療法の学問的位置付け。作業療法，21 (6)，pp. 512-515 (2002)
- 9) 西條剛央：研究以前のモンダイ 看護研究で迷わな

のための超入門講座. 医学書院. pp. 13 (2009)

- 10) 西條剛央：構造構成主義とは何か 次世代人間科学の原理. 北大路書房, (2005)
- 11) 西條剛央：構造構成主義とは何か 次世代人間科学の原理. 北大路書房, pp. 205 (2005)
- 12) 西條剛央：構造構成主義とは何か 次世代人間科学の原理. 北大路書房, pp. 51-81 (2005)
- 13) 西條剛央：チームの力 構造構成主義による“新”組織論. ちくま新書, pp. 61 (2015)
- 14) 西條剛央：チームの力 構造構成主義による“新”組織論. ちくま新書, pp. 106 (2015)
- 15) 富田昌夫：クライنفォーゲルバッハの運動学. 理学療法学, 21(8), pp. 571-575 (1994)
- 16) 菅野仁：教育幻想 クールティーチャー宣言. ちくまプリマ 新書, pp. 47-50 (2010)
- 17) 北川達夫, 平田オリザ：ニッポンには対話がない. 三省堂, pp. 45-173 (2008)